

# 19世紀中葉の英国におけるウェスレー派メソ ディズムの教育政策と民衆学校教育について（4）

## —改正教育令との関連（7）— 2 —

青 木 秀 雄

### 目 次

#### はじめに

#### I 1861年ウェスレー派の状況

- （1）ウエストミンスター師範学校の増築
- （2）ニューカッスル諮問委員会報告      （3）61年改正教育令覚書

#### II ウェスレー派の見解

- （1）教師の知識と教養      （2）3Rs と民衆教育      （付記）

#### III 改正教育令の修正案

- （1）1862年2月の修正改正教育令
- （2）1862年4月の修正改正教育令
  - ア 改正教育令に対する連合教育委員会抗議の表明
  - イ ウェスレー派の4月30日議事録パンフレット

#### IV 改正教育令発行と対応

- （1）改正教育令の発行      （2）ウェスレー派教育委員会の対応

#### V 改正教育令発行後のウエストミンスター師範学校の対応

- （1）教員見習生制度と同師範学校      （2）教員資格試験合格者の推移
- （3）同師範学校の再増築と財政難

#### VI ウエストミンスター師範学校と教育実習校の変化

- （1）師範学校の教科目内容の変化
- （2）教育実習校におけるスタンダード試験

#### VII 教員見習生減少の問題

- （1）小規模校における教育環境の荒廃      （2）アシスタント教員の増加

#### VIII ウェスレー派各基礎教育学校等のスタンダード試験対応

- （1）ウェスレー派教育委員会の見解と基礎教育学校の状況

（以上、前号）

- （2）スタンダードに対応する幼児学校（学級）の状況

ア 教師と生徒の信頼関係に基づく学級経営

イ スタンダードⅠとⅡのギャップ

## VIII ウェスレー派各基礎教育学校等のスタンダード試験対応

補助金の対象科目を3Rsに限定するR・ロウの考え方に対する反対論は、ケイ＝シャトルワースやマシュー・アーノルドらに代表される。それを簡略すると、労働者階級は宗教的・道徳的・知的に劣っているので、国家が道徳の師となり教育を与えなければならず、労働者階級に対する基礎教育の目的は、彼らの文明化（civilization）にあるというものであった。したがって、そこで要請される世俗教育の科目数は、数のうえでは3Rsよりも多いが、それらを通していずれも徳目の側面が強調された。

アーノルドは、改正教育令以前に学校で教えられていた科目数は23にものぼっていたことを指摘している。しかしながら、ニューカッスル委員会はそれを浅薄で皮相的と批判した。それが総合的で、幅広いものであったという証拠はないという。シルベスターも、ニューカッスル委員会委員会報告書を引いて、改正教育令以前の学校もまた、3Rsが支配的であったことを明らかにしている。また、改正教育令が教育内容を3Rsに限定したというのは間違いである、と視学官のフィーロンは当時述べているが、彼は同時に、実際にその他の教科を教える余力を持っている学校は少ないと指摘した。<sup>1)</sup>

しかし、ウェスレー派教育委員会とその基礎教育学校においては、スタンダード試験に直面した改正教育令以前も以後も、3Rsを基礎としつつそれ以上の教育がめざされていたし、また「総合的で、幅広い」教養教育が少なからず実践されていた。ウェスレー派においても「余力」があったとはいえないが、物事を深く考える教養ある教師の養成によって、児童の思考と知識や、堅実な習慣形成を教育目標にすえ、「最低の基準」に押し込める「間違った方向へのプレッシャー」というような改正教育令下の困難な状況のなかで、そのための教育実践に立ち向かっていたことが前号で明らかになった。

小論においては、幼児学校（学級）におけるスタンダード試験への対応状況を検討することにより、上記の問題を更に講究する。

### （2）スタンダードに対応する幼児学校（学級）の状況

#### A 教師と生徒の信頼関係に基づく学級経営

前号で触れたように、出来高払制において交付される補助金規定に対し1863年度報告書の中で、ウェスレー派の学校について視学官Armstrongは次のように指摘した。「幼児学校（学級）（infant schools）においてはこれ〔児童・生徒学校（学級）（juvenile schools）〕と実情が大きく異なり、もし自らの適切な価値を損なわないようにしつつ補助金を得たいのであれば、いくつかの修正をすれば済むに違いない。」<sup>2)</sup>

改正教育令によると、出来高払制において交付される補助金の規定の第2章第40条bの2項に、6才未満の場合、その子どもが年齢に適した教育を受け、年長の児童・生徒の邪魔をしていないとの視学官報告書を前提に、1人当たり6シリング6ペンスの補助金が交付されることになっている。このことに関して、Armstrongは上記に続いて次のように提案した。<sup>3)</sup>

幼児学校（学級）がスタンダード試験を免除されたことで、現在恐れられている多

くの有害な事柄を避けることが可能であろう。もし1年間の準備期間において、7～8歳の時期に最初のスタンダード試験を受けることにすれば、幼児学校（学級）は必要な条件を適切に十分満たすことができよう。ほとんどすべてのケースにおいて、幼児学校（学級）の課程（course）を適切に修了し、児童・生徒学校（学級）が要求する学科目修得の準備ができる年齢は7歳になってからである。6～7歳の子どもたちは集団化される年齢であり、その中のほんの少数に対して、最初のスタンダード試験科目の一つか二つに合格するように大雑把な準備を教師に要請すべきであろう。

出来高払制において交付される補助金の規定は下記のようなものであった。<sup>4)</sup>

学校管理者は、第17条で規定された年度末に、次に掲げる補助金の交付を申請することができる。（第2章第40条）

- a 週日学校においては、その学校の午前または午後の授業に出席した年間平均出席児童・生徒数に応じて、児童・生徒1人当たり4シリング、夜間学校においては、児童・生徒1人当たり2シリング6ペンスの補助金が交付される。
- b 週日学校においては、午前または午後の授業（2時間の授業を1回と見なして）200回以上出席したすべての児童・生徒にたいして、
  - 1 6才以上の者には、第48条で規定する試験に合格した場合、1人当たり8シリングの補助金が交付される。
  - 2 6才未満の場合は、その子どもが年齢に適した教育を受け、年長の児童・生徒の邪魔をしていないという視学官報告書に基づいて、1人当たり6シリング6ペンスの補助金が交付される。
- c 夜間学校においては、24回（1時間30分の授業を1回と見なして）以上出席した（12歳以上の）すべての児童・生徒に、第48条で規定する試験に合格した場合、1人当たり5シリングの補助金が交付される。

午前または午後のクラスに200回以上出席し、8シリング（96ペンス）の補助金が請求される者で、視学官による第48条に規定する試験において、読方・書方・算術に不合格の者は、それぞれ1科目につき、2シリング8ペンス（32ペンス）が減額される（第2章第44条）。

夜間学校に24回以上出席し、5シリングの補助金が請求される者で、視学官による第48条に規定する試験において、読方・書方・算術に不合格の者は、それぞれ1科目につき、1シリング8ペンスが減額される（第2章第45条）。

視学官Armstrongの見解は、「学科目修得の準備ができる年齢は7歳になってからである。6～7歳の子どもたちは集団化される年齢であり、その中のほんの少数に対して」スタンダードI試験科目のうちの「一つか二つに合格するように大雑把な準備を教師に要請」するのが適当であろう、というものであった。

なぜならば、これにより「自らの適切な価値を損なわないようにしつつ補助金」を得ることができ、「人格と未来の到達点を決定する人間形成の過程において、より影響力のあ

る教育目的とその方法を」保障できるからである、と彼は考えた。ウェスレー派において「自らの適切な価値」である「教育目的とその方法」は、もちろん単なる言葉や算術以上のものであった。

ウェスレー派幼児学校 (Infant-schools) の教育方法においては、幼児の興味と感情が重視された。たとえば、子どもたちがよく知っている内容の絵を見せ、そこに描かれている人物や事物についての言葉や歴史などが説明され「さまざまなテーマについて、思い出し、もしくは考え出されるよう、教師は問いかけ」る。その問いは、「子どもの年令と能力に応じて、しかも彼等の興味をそそるように」行われた。体育の行進や唱歌などは、幼児学校の教育の一番良いところとされた。教科書の読み方は指導されるが、必ずしも義務づける必要はないとされ、「狭い教室にずっととじ込められているような教育環境よりも、良い空気のある戸外でする体育を大に取り入れるべきである」と考えられてきた。<sup>5)</sup>

そこで、幼児学校の教師には女性が適しているとされ、その自然な長所として「想像力、感情、機敏さ、穏やかな優しさ、根気、情熱」が男性より優れている。「女性で、教養があり教育技術に優れ、幼児への温かな思いやりをもち健康であるならば、常に最高の幼児学校の教師」になれる、とウエストミンスター師範学校長J・スコットはいう。たとえ教師としての教育は受けていなくとも、幼児に対するやさしさと宗教的配慮をもつ女性ならば、師範学校を卒業したが、「幼児への関心がなく、真の教育方法を身につけていない教師」よりもずっと良い影響を与える、とまで彼はいい切っている。<sup>6)</sup>

また教師をめざす学生は、教師として教授 (instruction) に心がけるだけではなく、「生徒を感化 (influence)」しなければならない、と考えた。「感化というものは、行動に対して長く働きかけるものなので、思考、感情や行為における悪い習慣がつく前に、人はよく感化されなければならない」。大志をもって、この崇高な教育の目的の達成、すなわち「生徒の精神と人格を天与の模範に従って形成すること」が重視された。<sup>7)</sup>

したがって、「芽を出しかけている能力や感情をもつ子どもの本性を真に理解すること」と「子どもに対する心からの愛情と彼等が求めている興味関心に対する共感」が何よりも重要である、とJ・スコットは強調した。これにより、教師の理性的な権威と愛情に基づく感化を教育の基本にすえていた。<sup>8)</sup>

もし教師がしばしば生徒を怒ったり、教師自身の怒りっぽさや指導力の不足に直接の原因があるのに、それを生徒に転嫁するならば、また教師が暴力的な規律に頼り、体罰に依存するならば、生徒の愛情は獲得できません。それよりも、心と心によって、野生のような激情を抑制する、確固たる権威である理性に基づいて児童の心に及ぼす感化に頼るべきなのです。このことは、諸君がこの学校で体験してきたことです。何の疑問もないと思います。〈中略〉またこれとは反対に、放任過ぎる気質 (over-easy temper) は、よき規律と向上心に対して、荒々しさと厳格さと同様致命的です。教師の親切、個人的世話や慈愛の深さの結果、生徒は教師に愛着を感じるようになるのです。決して権力からではなく、秩序によりその環境が維持されることを、生徒は好むと信じます。<sup>9)</sup>

晩年のJ・スコットが、1867学年度年頭の講演において、教師の資質として重要なものは教養（the cultivation of your minds）であることを指摘した。「内面の教養は、外面的な教化（cultivation）、つまり良い習慣と態度とによって形成される。」そして、「教師の良き態度が子どもたちの手本となるように、この師範学校で教育される。」「教養は、すべてに尊敬される上品さに包まれた習慣の形において必ず外に現れ」る、といっているように、言葉以前の問題、すなわち感情と行為・習慣形成を一貫して重視していたことがわかる。<sup>10)</sup>

教師と生徒の信頼関係に基づく学級経営の重要性が、ウェスレー派では以上のように指摘されていた。このことは視学官の一般的な意見と一致していたといえよう。すなわち、「真の学校教師こそが学校なのである」と、ある視学官がいったように、学校教育の成否の鍵を握っているのは教師である、というのが視学官たちの見解であったからである。<sup>11)</sup>

### イ スタンダードⅠとⅡのギャップ

このように知性と感情・行動のバランスよい発達をめざしたウェスレー派幼児学校においては、ひしひしと迫るスタンダード試験制度推進の重圧がその教育の根幹を破壊するものと映っていた。1864年のウェスレー派教育委員会年次報告書において、「幼児を普通学校（common school）に移すような政策に対しては断固反対であるので、昨年に継続してこのことを論じたい」として次の見解を述べている。<sup>12)</sup>

幼児学校の主目的と、スタンダードⅠが要求することに対し、矛盾を感じないかも知れない。しかしたとえ、それ以上のスタンダードを目標にしようとも、全体において次の理由からまったく望ましいことではない。口頭による適時に作用する指導（simultaneous instruction）が、幼児の成長と教育には不可欠である。正確さをスタンダード試験が要求すればするほど、個々人の試験に対応するための個別指導が必要になってくる。したがって、スタンダードⅠ以上のことをめざせば、幼児学校で今日まで維持されてきた教育力は変質し、幼い子であればあるほど放任の状態に置かれることになるであろう。

8歳以上若しくは7歳の児童と3・4歳の幼児を比べると、そこには知識と感情、行動様式において大変大きな違いがある。後者の幼児においては、気を引く些細な趣向ややさしく説明するというような学級経営が必要であるが、前者においてはそれは不適切であって、厳格な規律が必要である。ウェストミンスター地区の幼児学校では、直ちに前述の様な方式に移行し、全員スタンダードⅠの受験生にすることを原則にした。一般的にこの教育課程のほうが賢明であると考えからである。その地域や臨時の状況から、スタンダードⅡの受験をめざすケースもあるかもしれないが、ウェスレー派教育委員会としてはそれはあまり好ましくないと考える。

「スタンダードⅠ以上のことをめざせば」、前述のような「幼児学校で今日まで維持されてきた教育力は変質し、幼い子であればあるほど放任の状態に置かれる」ことは、容易に想像できよう。つまり、7歳に近い幼児を主な対象として、読方・書方・算術に特化し

た「偏向教育」に陥ってしまうという危惧である。その結果、「幼い子であればあるほど放任の状態に置かれることに」になってしまう。しかしながら、幼い子ほど「口頭による適時に作用する指導が幼児の成長と教育には不可欠」であり、また「気を引く些細な趣向ややさしく説明するというような学級経営が必要である」という見解であった。

ところで、6段階のスタンダード（the six standards）とは次のようなものであった。<sup>13)</sup>

試験によって補助金が支払われることになる全ての生徒は、以下に規定されたスタンダードの1つに準じて試験されなければならない。そして、その後は、それと同一の、またそれより低レベルのスタンダードの試験を受けてはならない。（第2章第46条）

半労半学のためのなんらかの法律の下で、出席回数が100回に達したものが補助金の交付を受けるためには

a試験を受けなければならない。

b最高基準の試験に合格した後も、同じ法律の下で就学を続けるばあいは、試験を受ける必要がない。

試験のための教育的基準（第48条）

基準Ⅰ

読方……単音節語からなる読物を読むこと

書方……視学官の口述に従って、アルファベットを大文字と小文字で黒板か石板に書くこと

算術……視学官の口述に従って20までの数字を黒板か石板に書くこと。見てすぐ20までの数字を声をだして読むこと。黒板に示された例を見て口頭で10までの数を足したり引いたりすること

基準Ⅱ

読方……当該校で使用している初歩読本の中の読物の1つを、初め単音節語で読み、次に語順に従って読むこと

書方……活字体の1行を筆記体で書くこと

算術……簡単な加減の計算と掛け算ができること

基準Ⅲ

読方……当該校で使用している読本の中から抜きだした1節を読むこと

書方……読方と同じ節から抜きだした文章を視学官の口述に従って1度に1語ずつゆっくりと書き取ること

算術……簡単な加算、減算、掛け算に加えて簡単な割り算ができること

基準Ⅳ

読方……当該校で使用しているより程度の高い読本の中から抜きだした短い1節を読むこと

書方……同じ読本の中から一しかし読方のときに用い中った1節から一抜きだした文章を、視学官の口述に従って1度に数語ずつゆっくりと書き取ること

算術……四則の計算ができること（通貨を用いて）

基準V

読方……当該校の最上級クラスで使用している読本の中から抜きだした数行の詩を読むこと

書方……当該校の最上級クラスで使用している読本の中から抜きだした文章を、視学官の口述に従って1度に数語ずつゆっくり書き取ること

算術……四則の複合からなる計算ができること（簡単な度量衡を用いて）

基準VI

読方……新聞や最新の読物の中から抜きだした短い平易な1節を読むこと

書方……新聞や最新の読物の中から抜きだした別の短い平易な1節を、視学官の口述に従って1度に数語ずつゆっくりと書き取ること

算術……小荷物の実算または請求書の計算ができること

このスタンダードのⅠとⅡを比較すると、大きなギャップがあることに気づく。「読方」では、単音節語を読むから、語順に従って読む。「書方」では、アルファベットを大文字と小文字で書くから、活字体の1行を筆記体で書く。「算術」では、20までの数字を書く、例を見て口頭で10までの数を足したり引いたりするから、簡単な加減の計算と掛け算ができること、という形式になっていて、基準Ⅱにおいての指導にはテキストが必要であることがわかる。知性と感情・行動のバランスよい発達をめざしたウェスレー派幼児学校では、テキストを用いるよりも、前述したように「口頭による適時に作用する指導が幼児の成長と教育には不可欠」と考えた。

そこで、ウェストミンスター地区の幼児学校は、「全員スタンダードⅠの受験生にすることを原則に」直ちに改正教育令に対応した。そして、「その地域や臨時の状況から、スタンダードⅡの受験をめざすケースもあるかもしれないが、ウェスレー派教育委員会としてはそれはあまり好ましくない」としたのである。結局、その対応に苦慮した結果、ウェスレー派は折衷案として、幼児学校ではスタンダードⅠのみを目指す教育課程を原則とすることになった。これについては、次のAlderson視学官の報告書も参考にしたと考えられる。<sup>14)</sup>

スタンダード試験の中でも最も有効なものはスタンダードⅠであろう。幼児学校がずっと必要としていたものが実現したからである。つまり、幼児学校の年長者に対し、良識があり、明瞭な学習指導の基準が設定されているからである。しばしば幼児学校の教員は、どのようなことを教えるべきであり、教えないほうがよいかについて途方に暮れていた。今や完全な基準、明確な基礎である3科目が目前にある。私はこれは我が国の教育において永遠の偉大な進歩であると確信する。私の考えでは、改正教育令が定めているよりも受験年齢を延期して学校に在籍することは賢明ではない。幼児と児童・生徒の併設校（juvenile and infant departments）においては、スタンダードⅠの試験の準備教育を幼児に課すことは、規則に従って幼児学校の教員に任せるべきである。もちろん、教育を受けられずに下級学齢に至ったような例外はあろう。

しかし原則的には、最下位のスタンダード試験受験者は幼児学校に属すべきであって、それより上級の学年に所属する者はきわめて少数にすべきである。(中略) 幼児学校と幼児と児童・生徒の併設校の線引きは、将来可能な限りスタンダードⅠとⅡの間に置かれることになろう。

その上で、ウェスレー派教育委員会においては、年齢にこだわるよりは、幼児自身の能力を優先して対応すべきであるとした。

1人当たり8シリングの補助金をもたらすという金銭的な理由からだけで、子どもたちをスタンダード試験に出席させられるというようなことがあってはならない。「6歳の幼児がスタンダードⅠの試験に臨むときを想像するに、合格の自信がない者ほど消極的になるのは当然であろう。一度不合格になった子どもは、翌年のスタンダードⅡの試験においても、再び不合格になる公算が大きい。」結局、積極的な学校生活を過ごせずに、その子は希望もなしに望ましい成長は遂げられないであろう。同時に、その子の出席に対する国庫補助金が得られるだけで、スタンダード試験の補助金は得られない。したがって「このようなケースにおいては、とにかく出席を断念して最初もしくは2度目の受験を遅らせるか、もう1年を彼に相応しい幼児学校か、基礎学級 (elementary class) に残したほうがよい」との見解であった。<sup>15)</sup>

以上のように、ウェスレー派の幼児学校 (学級) においては、スタンダード試験に直面した改正教育令以前も以後も、教養のある教師 (特に女性) を養成することによって、教師と生徒の信頼関係に基づく学級経営を重視し、知性と感情・行動とのバランスよい発達をめざした、堅実な習慣形成を教育目標にすえていた。そこで従来どおり、テキストを用いずに、「口頭による適時に作用する指導」が可能な、スタンダードⅠのみを目指す教育課程を原則にしたのである。改正教育令への対応に苦慮した結果、このような折衷案によってウェスレー派は、それに対応したのであった。

したがって以上の考察から、幼児学校 (学級) も基礎教育学校同様に、「最低の基準」に押し込める「間違った方向へのプレッシャー」というような改正教育令下の困難な状況のなかで、3RsをスタンダードⅠのみに限定して取り入れつつも、ウェスレー派が従来続けてきた、幼児に相応しい「総合的で、幅広い」教養教育が曲がりなりにも実践されていたことは明らかである。

#### [註]

- 1) 太田直子『イギリス教育行政制度成立史-パートナーシップの原理の誕生』東京大学出版会、1992、p. 57。
- 2) および 3) *The 24 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education 1863*. London, 1864, Appendix I, p.17.
- 4) マシュー・アーノルド (小林虎五郎訳)『再改定法典』(*The Twice-Revised Code*. 1862) p. 20-2.
- 5) Scott, John; *School and Teachers, An Address to the Students in the Westminster Training Institution, Westminster in 1856*. Westminster Training College, 1869, pp. 48-



9.

- 6) Ibid., p.49. 青木秀雄「19世紀中葉の英国におけるウェスレー派メソディズムの教育政策と民衆学校教育について（3）—50年代までの教員養成問題を中心に（下）」『明星大学教育学研究紀要』第13号，1998. 4， pp. 45-6参照。
- 7) Scott, John; *The Teacher's Best Qualification, An Address to the Students in the Westminster Training Institution, Westminster in 1855*. Westminster Training College, 1869, p. 31.
- 8) Scott, John; *School and Teachers, An Address to the Students in the Westminster Training Institution*, op., cit. p. 49.
- 9) Ibid., pp. 55-6.
- 10) *The 27 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education 1866*. London, 1867, pp. 21-30.
- 11) 「上野耕三郎英国勅任視学官報告書に見られる教育の理論—近代国民学校成立の一考察」教育史学会紀要『日本の教育史学』第23集，講談社，1980.10。
- 12) *The 25 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education 1864*. London, 1865, p. 29-30.
- 13) マシュー・アーノルド（小林虎五郎訳），前掲書，p. 22-3。
- 14) *The 25 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education 1864*. op., cit. p. 36
- 15) Ibid., pp. 30-1.